6　次の文を読んで、後の問に答えよ。 〈京都大〉　二〇一五年度出題

　今は昔、中ごろの事にや、貧しく落ちぶれたる人、のたづきなきままに、似げなく、もの情けなげなる男のとなりて、片田舎に住み侍るが、この女、顔かたち美しく、何事につけても拙からず、琵琶、琴弾き、紙、歌のみ心深く、世の事わざや後れたりけん、かの男、さらに心あはずとて、（１）立ち去らんとす。されどこの女、人憎からず、うるはしきさまなりければ、（２）言ひ出づべき言の葉なくて、いかなるをか求め出でんと、折節を待ちゐたるに、風うち吹き、門田の稲葉そよめきあひて、もの寂しき夕つ方、「この稲葉につけて、よからん歌詠み給へ。さらずは添ひたてまつらじ」と言へば、女いと恨めしく恥づかしと思ひて、顔うち赤めて、

　　穂に出でてねとや人の思ふらんれなの我やきを見るら

と詠みたりければ、男いとかなしく思ひて、いささか事ととのはざるをも思ひ忍び、長きとなり果てけるとかや。されば、男女のともなりぬるは、ただこの大和歌なりとぞ。

（『雑々集』より）

注（＊）

身のたづき＝生活の手段。

草紙＝和歌や物語を記した書物。

いね＝「稲」と「去ね」との掛詞。

つれな＝形容詞「つれなし」の語幹。ここでは、素知らぬふうである様をいう。

あき＝「秋」と「飽き」との掛詞。

から＝ここでは逆接的な含意がある。

問１　傍線部（１）のように男が思った理由を説明せよ。

問２　傍線部（２）を、文意が明らかになるように、ことばを補って現代語訳せよ。

◎問３　和歌の第四句「つれなの我や」は、女のどのような気持ちを言ったものか、和歌全体を踏まえて説明せよ。

# 【解答と採点基準】

問１　Ａ妻は容姿が美しく、音楽や和歌などの風流なことには造詣が深いが、妻としての家事は苦手なので、Ｂ田舎者で風流心に乏しく世俗的な自分とはまったく気が合わないと思ったから。

妻と夫の両者を対比的に書いていなければ全体０。

Ａ＝６〔容姿の美しさ、風流を解すること、家事が苦手なことに触れていなければ、それぞれ減点２。〕

Ｂ＝４〔田舎者であること、風流を解さぬこと、世俗的である、あるいは実用性を重んじること、妻とは全く気が合わないと思っていることに触れていなければ、それぞれ減点１。〕

問２　男は、Ａ妻に離縁を切り出すのにふさわしい言葉が見つからなくて、Ｂ妻のどのような欠点を見つけ出そうかと、機会を待っていたところ

主語が抜けていれば全体０。

Ａ＝４〔「妻に離縁を切り出す」という意味がないと減点３。「ふさわしい」は「適当な」も可。〕

Ｂ＝６〔「欠点」が妻のものとわかるように書けていなければ減点1。「疵」のままだと減点１。疑問文になっていなければ減点２。「機会」に当たる語がなければ減点１。単純接続で訳していなければ減点１。〕

問３　Ａ夫の言葉から、夫が自分に飽きて別れようと思っているのはわかっているが、Ｂ自分は素知らぬふりをしてこのまま夫と暮らしていたいという気持ち。

Ａ＝５〔「人」が夫であることを明示していなければ減点１。「飽きる」がなければ減点１。「別れよう」は「追いだそう」なども可だが、この内容がなければ減点２。〕

Ｂ＝５〔「素知らぬ様子」がないと減点２。「今後も夫と暮らしたい」という内容がなければ減点３。〕

# 【現代語訳】

　今となってはもう昔のことだが、それほど昔でもないころのことだろうか、貧しく落ちぶれた女が、生活の手段がないので、（自分の身分に）似つかわしくない、風流も解しそうにない男の妻となって、片田舎に住んでいましたが、この女は、顔立ちが美しく、何事につけても下手ではなく、、琴の演奏、物語、和歌（のような風流なこと）にばかり造詣が深く、（妻としての）家事は劣っていたのだろうか、あの田舎者の男は、まったく気が合わないと思って、離縁しようとする。けれどもこの女は、人柄は立派で、礼儀正しい人であったので、問２（男は、妻に離縁を）切り出すのにふさわしい言葉が見つからなくて、（妻の）どのような欠点を見つけ出そうかと、機会を待っていたところ、風がさっと吹いて、（家の）門前の田の稲の葉がそよそよと音を立て合って、なんとなく寂しい夕方に、（男は女に）「この稲の葉にこと寄せて、よいような和歌を詠みなさいませ。そうでなければ（あなたとは）連れ添い申し上げないつもりだ」と言うと、女はとても恨めしく恥ずかしいと思って、顔をさっと赤くして、

　　穂先に実を結ぶと稲だと人が思うように、（気持ちを）言葉に出して、私に「去ね」（つまり、立ち去れ）とあなたは思っているのだろうか。秋が来るように（あなたが私に）飽きたのをわかってはいるけれど、（あなたとこのまま一緒に暮らしていたいから）素知らぬふりをしている私ですよ。

と詠んでしまったので、男はとても愛しいと思って、まったく家事がうまくできないことも我慢して、長く夫婦として生涯を終えることになったとか（いうことだ）。そういうことだから、男女の仲を取り持つものにもなったのは、た

だもうこの和歌であるということだ。